●「教える」とは、希望を語ること。「学ぶ」とは、誠実を胸に刻むこと。（ルイ・アラゴン）

連絡会ニュース

子どもと教育・くらしを守る広島県立学校教職員連絡会

No.1284 2024/04/25（Thu）

発行　広島高校連絡会事務局
Email renraku-kuko@mx6.tiki.ne.jp
HP　http:// ww6.tiki.ne.jp/~renraku-kuko/
携帯 090－1180－7644（村井義幸）
090－9738－8264（望月照巳）

「世界の小澤征爾」と日フィル争議をめぐって

多面的であるべき人への評価　（中山 英雄 ）

２月６日に亡くなったクラシック音楽の指揮者小澤征爾氏をめぐって２つの記事が新聞　赤旗に掲載された。ひとつは「朝の風」（3/11）というコラム記事、もうひとつは、音楽家　中山英雄氏の読者投稿記事(3/31)です。（別紙資料参照）この記事の由来は”日フィル争議”と言われ、日本のクラシック音楽界における大きな”事件”として現在でも語られていますが、これの全てのはじまりは 1969 年(日本フィル解散通告された年)であり、既に半世紀以上が経過しています。しかし、全国紙では小澤征爾氏が 1968～72 年まで日本フィル首席指揮者であったことを訃報記事ではいずれも触れてはいません。

小澤氏を日フィルに迎えたのは楽団創立者の水野成夫産経新聞社会長。日本フィルは当時、フジテレビ及び文化放送と年間１億５千万円の放送出演料で契約していました。71 年、日本フィル労組が大幅賃上げを要求をしてストライキを行ったところ当時の鹿内フジテレビ社長らは組合攻撃を強めました。両社は 72 年３月末で楽団との放送契約打ち切りを通告。支援財団理事会も解散を決議しました。このとき「労組の旗を降ろせばスポンサーが見つかる」と主張し組合を非難したのが小澤氏でした。小澤氏は団内の意見が一致しない中、未組合員らと分裂工作を進め「新日本フィル楽団」の結成に動きました。楽団つぶしに抗し全国の市民や労組の支援を受け楽団員は日本フィルを守り抜きました。音楽家　中山英雄氏の投稿は、日フル労組への分裂・弾圧に加担した小澤氏の言動も歴史的な事実として見る必要があることを投げかけています。音楽家として歩まれてきた中山氏の「人への評価は多面的であるべき」と述べる教訓を受け継ぎたいと思います。

【　日フィル争議の時系列　】

1956 年　文化放送が設立。
　フジテレビと文化放送の放送出演料(年間１億 5000 万)によって、日本フィル運営。
1969 年　文化放送とフジテレビが、日本フィルの解散を通告。
1971 年５月　日本フィルハーモニー交響楽団労働組合結成。
　12 月　同労組が日本音楽界初となるストライキを実行。大幅な賃上げを要求。
1972 年３月　文化放送とフジテレビは、３月末で放送契約の打ち切りを通告。
　６月　文化放送とフジテレビは、日フィルの解散と楽団員全員の解雇を通告。両社で構成される財団理事会も、解散を決議。
　「オーケストラ運営には多額の資金が必要なため運営が困難だから」と表向きではリリースされたが、実際は前年に行われた楽団員によるストライキが理由でした。
1972 年～　日本フィルは労働争議を起こす。（ 現在語られる“日フィル争議”）
1984 年　３月 16 日、「フジテレビ・文化放送両社は、労働組合側に２億 3000 万円の解決金を支払う」、「日本フィルハーモニー交響楽団労働組合は、フジテレビ構内の書記局を明け渡す」ことなどで和解が成立。
1985 年　現・日本フィルは、自主運営の財団法人となる。

約 12 年もの年月を経て、この“日フィル争議”は幕を下ろす。

「労組の旗を降ろせば，スポンサーは見つかる」（小澤征爾）～日本フィルと新日本フィルの分裂～

1972年に日本フィルが起こした労働争議“日フィル争議”によって、楽団員たちは２つに分裂することとなります。
存続のために動くグループ【日本フィル】約３分の２のメンバーは、日フィルの存続を求めて動き出します。
民間団体や財団に頼らない「市民と共に歩んでいく自主運営オーケストラ」を掲げ、自主的な演奏活動などで資金を得ていきます。
また、文化放送・フジテレビが行った解雇通達は不当として、東京地方裁判所へ提訴し解決を求めます。「市民と共に歩む」現在のオーケストラの存在意義を生み出すきっかけになりました。
新しいオケを立ち上げるグループ【新日本フィル】一方で、約３分の１のメンバーは解散に伴って労働組合を離脱します。
そして、当時の首席指揮者・小澤征爾や山本直純らとともに、新日本フィルハーモニー交響楽団を立ち上げます。このうち小澤征爾は「労働組合の旗を降ろせば、スポンサーが見つかる」と主張し、当時の労働組合を非難します。

あすなろ

▼人生百年時代と言われる。しかし、筆者の両親は、八三歳で無くなっている▼なので、自分の寿命も八三歳までとDNAに記憶されているのだと思い込んでいる。だとすると残りの人生は九年間という計算になる▼しかし、漠然と思っていることは、明日も今日と同じ一日が繰り返される(だろう)と言うことだ。しかし、未来は不連続であり、事件や事故は,起こる瞬間まで、普通の日常であったり,無事故運行だということは、もちろん大きな事故か小さな事故かは別にして、誰もが納得できることだと思う▼だから、「一歩足を進めるのは、希望ではなく,意志だ」「足を止めるのは、絶望ではなく、諦めだ」という漫画の台詞が思いだされる▼今の政治状況と、それを作り出している国民に絶望することは簡単だ。しかし、戦前の治安維持法下で逮捕の危険性と隣り合わせに赤旗を印刷紙続けた人々、そして赤旗を隠し持ちながら、多くの人が拡げ続けた歴史もまた、紛れもない日本の歴史だ▼そこからくみ出す意志で一歩進む。

2024/04/25